

経済システム分析の予備概念

神 武 庸 四 郎

目 次

はじめに

第1節 予備的考察

- I システムなるもの
- II システムの定義
- III 物理現象と社会現象

第2節 「社会システム論」的なシステム概念

- I 「問題」の構造
- II 「問題」とシステム
- III システムのホメオスタシス

第3節 オートポイエシスとレギュレーション

- I 圏論的に解釈したシステム概念
- II オートポイエシス
- III メタ経済学的な分析への視座

第4節 システムと機械

- I システムと人間の退化
- II 「自由機械」論
- III 人間の単能機械化
- IV 「遊び」と機械

第5節 コーポレーション・システムの諸問題

I コーポレーションとコーポラティズム

II コーポレーションとオポチュニズム

第6節 「社会的エントロピー」の概念

I コーポレーション・システムの「宿命」

II 生命体としての社会

III 「社会的エントロピー」の増大

第7節 社会は「自殺」するか——結論的覚書——

はじめに

近年、「構造」や「機能」といった方法概念を理論的に再構成するうえで一般システム理論の展開を踏まえたシステム概念の重要性が強調され、社会科学へのシステム概念の適用にかんしては、とりわけ社会学者によって重要な論点がつぎつぎと展開されてきた⁽¹⁾。実際に、ドイツの傑出した社会哲学者ニクラス・ルーマンによって社会システム理論の体系的な展開が試みられてきたことは周知の事実⁽²⁾に属するであろう。

本稿で私がとりあげようと思う検討課題は、こうした社会システム論的な視圏を再び普遍化し形式化して、経済システム一般の分析にも有効に適用しうるようなシステム概念を再構築することである。その結果として、経済現象を把握するばあいの新たな経済社会学的視点が導き出されるであろうことを私は期待している。なお、私自身はこうした視点から経済システム論を再検討する試みの一部をすでに論文の形で公表している⁽³⁾ので、本稿と合わせて参照されるならば私の意図がいっそう的確に理解されうであろう。

(1) W. L. Bühl, 'Einleitung : Funktionalismus und Strukturalismus' in

Funktion und Struktur : Soziologie vor der Geschichte, herausgegeben von W. L. Bühl (München, 1975), 参照.

(2) Niklas Luhman, *Soziale Systeme : Grundriß einer allgemeinen Theorie*, Suhrkamp, 1984, 参照. 邦訳として, ニクラス・ルーマン (佐藤勉監訳) 『社会システム論』 (恒星社厚生閣, 上巻 [1993 年], 下巻 [1995 年]) が参照に値する. 以下では, ルーマン『社会システム論』, と略記して原著頁と邦訳の頁とを併記する.

(3) 拙稿「経済システム論の基礎概念——『観察の観察』理論入門——」 (『一橋論叢』2005 年 4 月号, 所収).

第 1 節 予備的考察

I システムなるもの

吉田兼好の『徒然草』冒頭の一節から問題を展開させよう. 周知のように, そこにはこう記されている.

「つれづれなるままに, 日くらし, 硯にむかひて, 心にうつりゆくよしなし事を, そこはかたなく書きつくれば, あやうこそものぐるほしけれ。」

この引用文のなかの条件節に注目しよう. すなわち「心にうつりゆくよしなし事を, そこはかたなく書きつくれば」という部分である. このばあい「心」とはなんであろうか. それは思惟の場である. そこになにものかはいってくると, 人間の思惟装置に捉えられることになる. しかも, そのなにものかは「うつりゆく」もの, したがって歴史的なものである. しかもそれは「よしなし事」であるから, 存在理由や存在根拠の不確定なものでなくてはならない. そこにあるのは, まさしく本源的な対象である. その対象は「そこはかたなく」, つまり, 確定的な時空座標をもたない形で,

言葉によって記述される。換言すれば、言葉のあつまりからなる別の対象に移しかえられるのである。

ここにはすでに構造の形成される過程が明瞭に描かれている。それは初めの対象が人間の思惟装置の働く場を通過して別の対象に置き換えられるという過程である。数学者であれば、この過程を、対象と「射」のあつまりである「圏」の「演算」として、あるいは——さらに限定的に——「集合」と「写像」の構成図式として、ただちに認識するにちがいない⁽¹⁾。しかしもっと一般化していえば、それは人間が諸対象のあいだで思惟的に関係づけをおこなう過程なのである。この過程の所産は構成的構造である。とくに「構成する」構造の「構成される」構造に対する先在性は強調されなくてはならない。「構成される」構造を——往々にしてアプリオリと観念される——対象と見なすことは、素朴实在論的な認識方法につながりうる。

他方、この過程はそれ自体としても概念化可能である。それこそがシステムの概念である。装置が人間によって担われるかどうかとは無関係に、装置一般をオペレーターと捉え、それが媒介する順序づけられた対象をインプット、アウトプットとよべば、これらのカテゴリーによって構成される構造がシステムにはかならない。別の角度から見ると、「全体」、「変換」および「自動制御」という特性によって構造概念を規定したピアジェの「構造」はこうした意味のシステムとも見なされよう⁽²⁾。とりわけ「自動制御」という点を考慮すれば、フィードバック装置を内在させているシステムが彼のいう「構造」に相当するといってもよいかもしれない。しかし、用語の混乱を避けるために以下ではピアジェの「構造」概念は度外視され、形式化された記号論理的な意味の構造概念が前提とされることになる。

フィードバック制御にかんしてさらに若干の用語法を付け加えておこう。まず、制御自体もシステムであるから、制御装置の集合を抽象的に制御域

とよぼう。通常、制御域は多レベルである。制御域の作用するシステムは実物域とよばれる。そこには機能的に異なるシステムの「縦の」関係が見出される。⁽³⁾ つぎに、フィードバックと密接に関連するフィードフォワードについてやや詳しく付言しておこう。或るシステムの最終アウトプットにいたる時間経路でおこなわれるインプット制御あるいは経路上の副次的アウトプット制御はフィードフォワードとよばれるが、とくに他のシステムの影響（「外乱」）を消去する働きにその特徴が見出される。社会的な領域においては、とりわけ組織の機能分析に際してはフィード・フォワードが決定的な意義をもつ。ことに、プロセスの始めからインプット情報を抑制しようとするネガティブ・フィードフォワードが重要である。実際に、風評・噂・流言飛語によって行動を規制したり、相手の出方（たとえば上級命令権の動向）に配慮して「自主規制」したり、悲観的判断にもとづく諦観によって行動を中断したりするなど、さまざまなネガティブ・フィードフォワードが例示されうる。また、ゲーム論的な状況が想定されるばあいにもフィードフォワードは意味をもつ。そこでは行動を抑えるだけでなく、積極的に攻勢をしかける場面も出てくるので、ネガティブ・フィードフォワードとともにポジティブ・フィードフォワードも同等の意義をもってくる。フィードフォワードの機能が予測的であることの前提となっているのはフィードバックによって実行されるアウトプット情報からインプット情報への回帰過程である。たとえば、自分の運転する自動車が先行する自動車に追突した（アウトプット）とすれば、ブレーキを踏む（インプット制御）ことによってそれ以上の事態の悪化は避けられる。しかし、追突の衝撃で追突した自動車の運転手は死んでいるかもしれない。死のリスクを回避するには、あらかじめ運転者の心に描かれている追突の状況を未然に避ける行動がとられなくてはならない。追突という最終アウトプットにいたる前にインプット制御が適度に（たとえば、複数回にわけて軽くブレーキ

を踏む、といった形で) おこなわれなくてはならない。

- (1) この論点にはのちに第3節で立ち返ることになる。
- (2) ピアジェの構造概念については、Jean Piaget, *Le Structuralisme* (Paris, 1968), を参照せよ。
- (3) 実物域と制御域との区別については、経済学者コルナイが詳しく論じている。詳しくは、コルナイ・ヤノーシュ (岩城訳) 『反均衡の経済学』 (日本経済新聞社, 1975 年) を参照せよ。

II システムの定義

以上では、いくぶん叙述的ないし「技術的」な側面からシステムの概要を描いたが、さらに原理的な側面からシステムの意義、とりわけ、いわゆる「インプット/アウトプット図式 (Input/Output-Schema)⁽¹⁾」によってシステムを規定する意義を検討することにしよう。

形式的ないい方をすれば、要素とよばれる記号列に限なく特定の関係のなかに入っているようなもののあつまり——そのあつまりは数学的な意味での集合でなくてもよい——は構造と称される。構造それ自体は時間を必要としないし、また特定の空間的特性をもつ必要もない。そうした意味で構造は時空から独立している。多少比喩的な表現をすれば、構造は静態的な概念である。それと比較したとき、システムは動態的な概念として規定できるかもしれない。しかし、システムの独自性を表すには、さらに厳密な規定が要請されるであろう。すなわち、システムとは時間順序を取り込んだ構造、したがって運動する構造である。「運動」といったメタカテゴリーを用いる規定を採用するとき、システムは連続する構造であり、無限⁽²⁾の構造である、といってもおなじことになる。システムのこの規定を明示して時間順序をはっきり表すために、上述の「インプット/アウトプット

図式」，もっと正確に言えば「インプット→オペレーター→アウトプット図式」が有効性を発揮することになる．この関連でいえば，システムのフィードバックはシステムに時間順序の逆転，すなわち可逆性を保障する機能と見なされる．また，後述するように数学上の「圏（カテゴリー）」の理論に対応させるようにシステムを限定すれば，インプットとアウトプットとはシステムと「環境」との連結や分離を把握する有力な手段となりうる．その意味でも「インプット／アウトプット図式」としてのシステムの規定は重要である．ところで，「運動する構造」としてシステムが存在するということは，運動をやめたときにはシステムはシステムでなくなって構造に還元されてしまうことを意味する．運動という基底的な契機を叙述するにあたり，システム理論的には「自己準拠（Selbstreferenz）⁽³⁾」という表現が用いられる．それはシステムがたえず「統一（Einheit）」を確保する「原理」であり，システムを「統一」する契機である．「自己準拠」を論理的な起点としてシステムのオートポイエシスが導出されることは後に見るであろう．

システムの運動を分析するとき，「圏」論におけるようにインプットとアウトプットとを始領域（定義域，domain）と終領域（値域，codomain）に対応させオペレーターを射（morphism）と考えれば，両者の集合の構成はルーマンのいう「システム／環境—差異」⁽⁴⁾を定めることになる．さらに始領域と終領域とが一致していると仮定するならば，システムの要素は一義的な環境にすべて含まれていると見なされよう．この「環境（Umwelt）」のもとでシステムの運動は反復され，さらにオートポイエシスとして特徴づけられるようなシステムの開閉性や再帰性が導かれる．しかし，「環境」という表現には形式化するうえであいまいさが残るので，むしろ「場」という表現を用いるほうが適切かもしれない．というのは，そのほうが「システム環境」としての「場」そのものの形式的な位置づけ

が有効に展開されるばかりでなく、システムの「複合」に対応する「場」の「複合」といった問題についても適切な理論的処理が実行できるように思われるからである。しかし、以下では「場」の形式的構造の分析が主要な論点を形成することはないので、おもに「環境」という表現が多用されることになろう。⁽⁵⁾

- (1) ルーマン『社会システム論』S. 24, 邦訳(上) 11 頁.
- (2) 拙稿「歴史の構造」(『一橋大学研究年報 経済学研究』第 42 巻, 2000 年, 所収)におけるメタカテゴリーにかんする議論を参照.
- (3) ルーマン『社会システム論』S. 25, 邦訳(上) 12 頁.
- (4) ルーマン『社会システム論』S. 25, 邦訳(上) 13 頁.
- (5) 社会的領域における「場」の概念については、とりあえず、拙稿「社会的な場とコミュニケーション構造」(『一橋論叢』2004 年 6 月号, 所収)の参照をもとめておく.

III 物理現象と社会現象

以上のような、いくぶん抽象的な用語法を念頭に置いた上で、物理現象と社会現象を観察ないし観測するばあい为例にとつて、こんどは具体的なシステムのもつ意味を考えよう。たとえば、量子力学の多粒子システムのモデルと比較したとき、社会はたんなる粒子の集まりとは見なされない。それではどこがちがうのであろうか。

社会の「粒子」たる人間は意識をもち心像(イメージ)を形成しうる。このばあいの心像は形式的には射によって構成される構造である。複数の構成的構造を合成したり相互間に射を挿入したりする人間の行為は物理的粒子には見られない特徴である。さらに人間はこうした射を選択し、いかなる射を特定するか決定をおこなう。すなわち、粒子間に射が存在すると認識するのは人間であり、それは観測にほかならない。したがって観測

は有限の人間行為であり、その結果えられたものは物理的対象（としての粒子）の有限の像である。物理的対象がすべて観測できる根拠はない。たとえば、8次元空間の粒子の挙動を人間は観測する手段をもっていない。それを（3次元空間座標と時間軸からなる）4次元空間に「単純化」して「実在」の観測を実行するか、あるいは抽象的な方程式システムによる形式化をつうじて知覚できない対象——たとえば、無限次元空間の「超曲面」——の「外在」を仮定した抽象的「観測」——形式の無矛盾の証明——⁽¹⁾だけをおこなうか、そのいずれかしか認識手段は存在しない。

もちろん、物理学ではたとえばハートリー近似あるいはハートリー・フォック近似のような手法を用いて多粒子間の相互作用が処理されてはいるが、とりわけ社会現象にかんしては、人間どうしの相互作用としてお互いの情報のやりとり（コミュニケーション）が個々の人間による構成合成、射の構成、射の選択、そして射の決定によって影響を受けるので、法則的な把握は著しく困難になる。そこで一方では、観測者は疎外現象にもとづく物象化といった「仮定」を設けて人間の意志の自由を制約し、あたかも物理現象であるかのごとく人間社会の心像を創る。しかし他方、人間の意志の自由を前提として社会を構成する方法もありうる。それは、とりわけルーマンによって彫琢を加えられた「社会システム」理論である。そこでは「問題解決」と「環境」という二つの基礎概念を軸にしてシステム概念の再構成が図られている。つぎに彼の議論を検討してみよう。

- (1) この議論は認識論の根本にさかのぼる論点を含んでいる。哲学者三木清は「哲学入門」（『三木清全集』第7巻、岩波書店、1967年、所収）のなかでカントの「構成」的認識論を明快に解説しているが、他方で「模写説」的認識論についての説明はおよそ説得力をもっていない。まして、後者の立場からのカント「批判」はお粗末この上ない。なぜこうなのであろうか。おそらくは、俗流マルクス主義者の「模写説」的認識論を三木自身がなんとか「擁護」して

みせようという、ある種の「不純な」動機が作用していたためであろう。「模写説」なるものは対象を構成する集合の要素と認識主体の表象を構成する集合の要素とが、いわば「一対一の対応」を示すような、理想的状況を想定した認識の型にすぎない。「対応」ないし「写像」のいろいろな類型を設定するだけで「模写説」は瓦解する。さらにそれは認識主体の「外」に、超越的な対象を認めている。「外」とはなんだろうか。われわれは経験的に局所的な、せいぜい3次元の空間のなかに自己の表象の集合をもつにすぎない。すなわち3次元多様体の一隅に「住んでいる」のである。したがって、「外」なるものの想定は、認識の働きをはじめから恐ろしく狭隘な時空へと制限することを意味する。人間の日常性や固定的な常識をそれはドグマ化するのである。認識を「無限」の世界の内に「自由化」するためにはカントの根本的立場に帰らなくてはならない。三木清の要約によれば「カントは実体を一つの範疇、言い換へると思惟の先験的形式と考へたのである。物とは直観に与へられた多様なものが実体と属性といふ範疇によって構成されたものにほかならず、我々は物を構成することによって物を認識するのである。」(『三木清全集』第7巻、1967年、111-112頁。)

第2節 「社会システム論」的なシステム概念

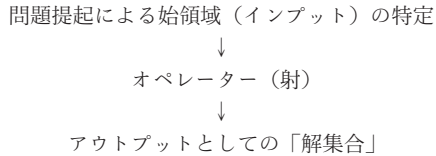
I 「問題」の構造

まず、「問題」の構造を明らかにすることからはじめよう。「問題」はなんらかの「解決」を想定している点で、システム概念の適用が有効性を発揮する対象である。システムの機能的意義は、ルーマンの指摘するように、「問題解決」によって規定される。⁽¹⁾ もうすこし正確に言えば、ばあいによっては相互に論理的に矛盾しうる複数の「問題」がインプットされ、それに対してオペレーターが作用させられてアウトプットとしての「解」が導出される構造的機能的存在がシステムにほかならない。その意味でシステムは運動を持続する動態的構造である。

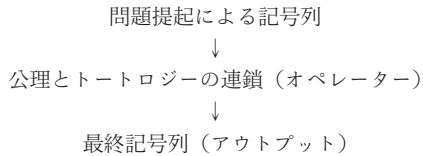
いくつかの類型が設定できるが、とくに以下のような事例が説明的な意味をもっているように思われる。

[1] 数学的問題解決

まず、具体的問題解決のばあいに見られるシステム図式は



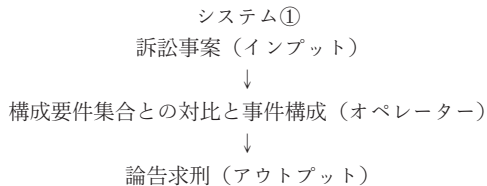
という形に表示されうる。またつぎに、問題解決としての証明のシステム化は



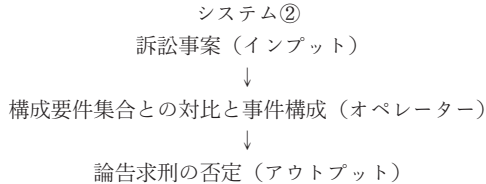
という具合になるだろう。

[2] 司法的問題解決（刑法犯罪のケース）

ここではつぎの二つのシステムが形成され、その上で比較が実行されるだろう。すなわち、



および、



という二つのシステムの比較により、事件の再構成と判決が最終的アウトプットとして導出される。

以上ふたつの事例のうち、数学的問題解決は形式的かつ内容的である。すなわち、数学的問題解決においては形式的問題解決がただちに内容的問題解決となる。他方、司法的問題解決は形式と内容とが分離する。したがって、内容的な問題解決をとみなわない形式的問題解決は無意味となる。問題解決に意味を与えるのは、比較の操作である。比較は当該法律のセマンティクスへの「関係づけ視点（Bezugsgesichtspunkt）」⁽²⁾を用意することによって問題解決の内容性を高めるわけである。

しかし、セマンティクスそのものが形式化されるとすれば、内容的問題解決は不十分になる。セマンティクスの形式化を規定するのは社会的コミュニケーションのありかたである。社会が孤立分散化してコミュニケーションが機械的になれば、そこには干からびた形式的問題解決しか見出されないかもしれない。⁽³⁾内容的問題解決をとみなわない形式的問題解決を問題凍結とよぼう。システムを機械に置き換えれば、問題凍結とは機械の操業停止である。しかし、注意しなくてはならないのは問題凍結もまたシステムにとってひとつの「問題解決」だということである。形式的にも内容的にも問題解決に繋がらない第三のケースも想定できる。それは問題消去、すなわちオペレーターの消滅である。機械との比較でいえば、機械解体（ラダイツ）である。問題消去にかんしてはひとまず議論を保留し、つぎに問題解決と問題凍結との関連について検討しよう。

- (1) ルーマンによれば「機能的分析がもたらす利益は特殊な原因と特殊な結果との結合の確実性にあるのではなく、抽象的な関係づけ視点の、すなわち『問題』の、確定にある。『問題』によって、行為の異なった諸可能性からきわめて多様な印象をあたえる社会的諸事象が機能的に同等なものとして処理される」のである (Niklas Luhmann, 'Funktionale Methode und Systemtheorie', in Bühl, *op. cit.*, S. 106).
- (2) *Ibid.*, S. 121, 参照.
- (3) この点については、拙稿「冤罪とコミュニケーション構造」(『一橋論叢』2003年6月号, 所収), 参照.

II 「問題」とシステム

システムの運動が「問題」を媒介にしてどのように進行するかをふたつの「社会システム」ないし組織を比較して例証してみよう。

いま、夫婦という組織を考えると、そこではさまざまな紛争が醸成されてくることが推定される。夫婦関係は性的関係を前提として成り立っているが、それだけでは動物全般に共通する雌雄関係となんら異なるところはなくなる。その独自性はある種のオペレーター（射）を操作して心像を自由に合成する二人の人間がたえず問題解決を図りつつシステムを維持している点にある。なんらかの、相互に決定的と思われる問題について問題凍結が累積していくと、ついにはこのシステムそのものが破綻する。すなわち、離婚が成立して夫婦関係は解消される。しかし、夫婦システムがいかに円滑に維持されつづけたとしても、それは永続することがない。というのは、この組織は有機体としての死（夫婦いずれかの死）を免れられないからである。他方、株式会社という組織は夫婦とは異なる。それは論理的には永続する。なぜならば、それを担う株主や機能的社員は「交換可能」であって、個々の人間の生死とは無関係に補充できるからである。株式会社のシステムとしての運命を左右するのはもっぱら問題凍結の累積的效果

である。たとえば、累積的な債務による経営破綻はこの組織を消滅させるに十分な力を発揮する。「社会システム」の一般的類型は後者の型であろう。夫婦ではなく家族という組織を想定すれば、これは株式会社に近似する。しかし、そのばあいシステムの「問題状況」は複合化していることが注意されなくてはならない。現実存在しているシステムは、すでに指摘したように、問題凍結をも「別解」として許容するのである。だから、システムは論理的矛盾を内在させつつ「存続維持」をはかっていくことができる。ルーマンはこういっている。

「問題となるのは、『 $A = \text{非} A$ 』という意味における厳密に論理的な、あるいは弁証法的な矛盾ではない。そのことは、異なる問題の同時的解決を考えがたくするだろう。しかし機能主義の命題がまさに語っているのは、このような『諸矛盾』にもかかわらず、社会システムは存続しうるということである。⁽¹⁾」

そこで、このような「社会システム」の存立を規定する、いまひとつの契機が考えられなくてはならない。それは「環境」あるいは「場」である。

(1) Luhmann, *op. cit.*, S. 114.

III システムのホメオスタシス

システム一般ではなく、とりわけ社会システムを想定して議論を展開させようとするばあいには、システムをいわば即自的に、孤立させて論じるわけにはいかない。システムはそれを取り巻く「環境」と不可分である。その「環境」は別種のシステムでもありうるし、いろいろな構造の集合でもありうる。ルーマンはこうしたシステムの捉え方を「システム・環境理

論 (System/Umwelt-Theorie)」とよんでいる。⁽¹⁾このような方法的視角からシステムを考えようとすれば、システムの運動はそれ自身の構造を保存する持続的な運動として現れる。ウィーナー (Norbert Wiener) の表現にしたがえば、それはシステムのホメオスタシス (Homeostasis) である。⁽²⁾彼はフィードバック原理と生理学との関連でこの概念に言及しているにすぎず、システム論との結びつきを一般的に論じているわけではない。さらに踏み込んだ規定を試みているのはルーマンである。彼によれば「有機体は…… (中略) ……固有の能力のインプットによって変化する環境条件および環境事象に対して有効な形で補償的に、代替的に、阻止的に、また補完的に作用し、こういうふうにして固有の構造を不変にたもつ」のである。⁽³⁾すなわち、一般にシステムは「自己保存」機能をもっているが、その機能は「環境」への適応を含めてシステムの持続を保障するものでなくてはならない。ホメオスタシスとはそうした機能のことを意味しているのである。ルーマン自身はのちにオートポイエシスという方法概念に依拠して、「社会システム」の特性をさらに立ち入って論理的に記述しているが、この概念についての議論は次節にゆだねることにしよう。

ところで、なんらかの「社会システム」が想定されたとき、ルーマンのように「人間」は「環境」と見なされうる。というのは「社会システムは人間から成り立っているのではなく、期待に操作される諸行為から成立している」⁽⁴⁾からである。他方、人間は個人としてひとつのシステムを構成するので、このときには社会が「環境」となる。こうした状況のもとで、ホメオスタシスの運動を定式化してみると、どんな具合になるだろうか。そこには三つのホメオスタシス類型が区別される。すなわち、

- [1] 社会システムの「自己保存」を指向する社会的ホメオスタシス、
- [2] 社会的人間の「自己保存」を指向する個人的ホメオスタシス、
- [3] 非社会的人間の「自己保存」を指向する「孤人」的ホメオスタシス、

である。ここで、「孤人」とは社会を前提とした上での「即自的」個人であり、個人とは「対自的」「孤人」のことである⁽⁵⁾。また、「自己保存」という表現にはシステムのオートポイエシスが含意されているけれども、それはのちの議論にゆだねることとして、当面は文字通り self-preservation の意味で「自己保存」を用いておく。いま、[1] と [2] との軋轢が生じて [2] が実現不能になったと仮定する。そのばあい、[2] は [3] にいわば「退化」するであろう。このとき、個人間の社会関係は「孤人」間のそれに移行し、個人的コミュニケーション構造は「孤人」的なそれに移り、そこに機械相互のコミュニケーションに類似のコミュニケーションを実現する「場」が登場する。それは法、政治、経済などいくつかの社会的な領域におうじて異なった構造をもつであろうが、それらの構造のあつまりはいわば「ディスクリート社会」ないし「離散的社會」を構成するにいたる⁽⁶⁾。社会が「離散的社會」への傾斜を強めるとき、本来の個人は——そして、もちろん「孤人」も——コミュニケーションの相互性から離脱する状況、すなわちディスコミュニケーションを指向する傾向をますます強めることになる。それにもかかわらず、「離散的社會」は「システム合理性」に由来する一種の機械的合理化をつうじて「自己保存」に指向するであろう。そのばあい「或る行為システムは……（中略）……まさに機能の潜在的持続の機能でありうるから、それはシステムの合理性に決定的に寄与し、そのかぎりでは置換がむずかしくなる」⁽⁷⁾のである。

ところで、ホメオスタシスという概念を重視するあまり、そこに社会的諸現象の説明手段をなにもかも見出そうとするのは無益であろう。また、ホメオスタシスに関係づけてその「質的転換」から社会のカタストロフィーを性急に論じることは荒唐無稽のそしりを免れない。おそらく、社会学における「自己組織性 (self-organicity)」という用語に対応する程度の意味付与にとどめておくのが無難かもしれない。次節では、ホメオスタシス

ではなくオートポイエシスという言葉で把捉されている「社会システム」の特性を形式的な側面から吟味し、システムを捉える新たな視圏の可能性を吟味しようと思う。

- (1) ルーマンによれば「機能的理論はシステム・環境理論である」(Luhmann, *op. cit.*, S. 111.)
- (2) Norbert Wiener, *Cybernetics : or Control and Communication in the Animal and the Machine*, 2nd ed. (MIT Press, 1961), pp. 114-115, 参照.
- (3) Luhmann, *op. cit.*, S. 109.
- (4) *Ibid.*, S. 118.
- (5) これらの言葉の意味については、前掲拙稿「冤罪とコミュニケーション構造」を参照せよ.
- (6) 「ディスクリート社会」の語義は前掲拙稿「冤罪とコミュニケーション構造」のなかで説明されている。また、「社会的な場」の理論的な分析にかんしては前掲拙稿「社会的な場とコミュニケーション構造」, 参照.
- (7) Luhmann, *op. cit.*, S. 123.

第3節 オートポイエシスとレギュラシオン

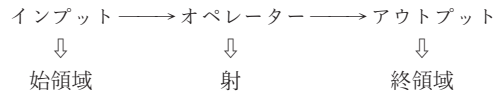
本節では、まず数学上の圏の概念に対応させる形でシステム概念を形式化し、つぎにそれをふまえてオートポイエシスの概念およびそれとの関連でレギュラシオンの概念を検討し、最後に、ひとつの例証としてメタ経済学的なシステム分析を試みることにしよう。

I 圏論的に解釈したシステム概念

第1節で規定したように「インプット・アウトプット図式」としてシステムを捉えたとすれば、その最も抽象的な表現形式はこれを圏（カテゴリー）として理解することができる。⁽¹⁾ この解釈をさらに詳しく論ずることか

らはじめよう.

まず, 圏とシステムとの対応は下のように図解されるであろう. このばあい, オペレーターは作用素, 演算子, 関数, あるいは写像として解釈できるが, それを一般化して射 (morphism) と見なすことができる.



始領域と終領域とを一括して諸要素の集まりと見なし, オペレーターを要素間の関係と考えれば, システムは構造になる. 構造の運動過程をプロセスとよべば, 構造としてのシステムはプロセスとして二つの特性を示す. 第一のプロセス特性は一般に連続であり, つねに共時的な運動の循環あるいは可逆的反复に還元できる. その最も簡単な形式は後述のメカニズムである. 第二のプロセス特性は不連続である. それは不可逆的反复ないし不可逆的順序 (狭義の歴史) を形成する通時的運動である. ここには, 「革命」や「戦争」や「突然変異」などに媒介される構造変換が随伴する.

つぎに, オペレーターは多様な性質を示すであろう. とくに, 圏内の射, 圏外への関手 (functor), 二項関係あるいは (二項関係に還元可能な) 多項関係が基本的である. またアウトプットの特性も, 対象と方法の要請におうじて, 圏内の領域や圏外領域が想定され, またインプットとの関連でインプットの保存 (量的拡大や同型やメカニズム) またはインプット変換 (別のオペレーターとの接続) などが考えられる. こうしたオペレーターの機能構造にとって不可欠の要素がコード (code) である. コードはインプットとしてのメッセージの処理 (「解読」) やアウトプット (メッセージ) の送信を可能にする理論的な記号列である. コードはひとつのオペレーターのなかに複数存在するのが通例であろう. そうしたコードの制作

もまたオペレーターの機能であり、それはコード化 (coding) とよばれる。複数のコードが論理的に矛盾するケースも考えられるが、そのばあいコードとコードとを分離する「絶縁体」が必要となる。「絶縁体」の生産もまたオペレーターの機能に含まれる。

以上の特徴づけを前提としたうえで、システム特性についてさらに詳しい検討に移ろう。

- (1) この可能性を示唆しているのはピアジェである。Piaget, *op. cit.*, pp. 24-25, 参照。

II オートポイエシス

社会のシステムを考える上で、その特性としてしばしば問題とされるのがオートポイエシスである。オートポイエシスとは「システムの諸単位の再生産の統一 (Einheit der Reproduktion der Einheiten)⁽¹⁾」である。たとえば、行為のシステムにおいては細胞や高分子などが繰り返し再生産されるのではなく、行為が再生産されなくてはならない。⁽²⁾ こうしたシステムこそがオートポイエシス・システムの特徴なのである。ルーマンはこういつている。

「オートポイエシス・システム理論にとっては、いかにしてそもそも要素という出来事にもっとも接近できるのかという問いが優先的に立てられている。ここでは基本問題の核心は要素の繰り返し (Wiederholung) ではなく、要素の接続能力 (Anschlußfähigkeit)⁽³⁾ にある。」

したがって、要素間に時間的順序が想定されるとともに、どの階層の要素 (たとえば、細胞と行為のように) が対象となっているかによってシステ

ムの特性が規定される。圏論的にいえば、オートポイエシス・システムにおけるオペレーターはたんなる射であるのみならず、関手でもある。関手がつなぐ圏の要素として要素が規定されるわけである。

ところで、オートポイエシス・システムは「自己準拠」システムである。すなわち「それぞれの要素は、それ以外の要素を介したその要素自体への再帰（Rückbeziehung）を可能にする」ので、「自己準拠」システムとしてのオートポイエシス・システムは「閉システム」である⁽⁴⁾。しかし、同時にそれは「或る環境のなかでしか、或る環境との差異のなかでしかこの再生産を実行できないかぎりで、開システム」である⁽⁵⁾。形式的に見るかぎりでは、ルーマンのオートポイエシス論は数学における Clopen Sets の議論に近似している。しかし、それは集合論的な観点から見ると位相空間に関係づけて考えるほうがよかろう。というのは、閉かつ開の集合は、不連結集合（空間）の部分集合として規定されるからである。ともに閉かつ開の部分集合を、たとえば F_1 および F_2 とすれば、不連結集合 F は

$$F = F_1 \oplus F_2 \quad (\oplus \text{ は直和を表すものとする})$$

という形に表示される。このような集合の合成として社会が表現されるとき、それはシステムと「環境」という社会の二元的把握に対応する。

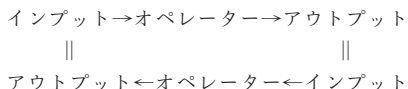
以上の特徴づけをふまえながら、ルーマンはオートポイエシス・システムとしての社会をコミュニケーションとの関連でつぎのように描いている。

「社会は有意義なコミュニケーションに基づくオートポイエシス・システムである。それはコミュニケーションからなり、コミュニケーションだけからなり、あらゆるコミュニケーションから成り立っている。そのことによって、つねにコミュニケーションとして生起するものは社会の実現であると同時に社会の再生産である。したがって、コミュニケーションは社会の環境のなかにも社会の環境とともに存在しえない。そのかぎりでもミ

ユニケーション・システム社会は閉システムである。しかし、その社会が存在できるのは或る環境のなかだけであり、とりわけ心理的意識、有機的生活、物理的物象、太陽と原子の進化のおかげによるばかりである。社会がこうした状態を確認するのは、開システムとしてそれが確立されているためである。社会はなにもものかにかんして、社会の環境や社会自体や、ちょうど進行しているコミュニケーションの関係するテーマにかんして、コミュニケーションをおこなう。だから社会は閉システムであると同時に開システムであり、またコミュニケーションはこの組合せを持続的に導き再生産する基本操作の形態なのである。⁽⁶⁾」

ルーマンの見解を私なりに再解釈していい換えてみるならば、始点だけの定まった情報発信行為としてのメッセージ的行為がコミュニケーション⁽⁷⁾となるうえでの偶然性が除去されているとき、社会はコミュニケーション・システムとして成立し、それはオートポイエシス・システムでもある、ということになる。システムとしての完結性が閉システムを特徴づけ、他のシステムとの相互関係性が開システムを特徴づける。そのばあいの完結性や相互関係性はコミュニケーションによって与えられるので、社会の構造はコミュニケーション構造に還元される。

このばあい、閉システムとしての特性はそれ自体としてのインプットとアウトプットとの消滅である。たとえば、後述のメカニズムの概念（アウトプットがつぎのインプットとなるような連鎖関係）を先取りしていえば、「メカニズムが閉じているばあい」を想定して考えると、そのことは明らかであろう。いま、二つのシステムがメカニズムとして閉じていると仮定しよう。そのばあい、つぎのような図式が描けるであろう。



ここでは、システムのインプットが他方のシステムのアウトプットと一致しているので、四角のなかのシステムは完結性をもち、その結果、インプットとアウトプットとは消滅している。この点だけから判断すると、この「システム」はシステムの形式に矛盾するけれども、それは全体として「環境」とのあいだにインプット・アウトプット関係を取り結ぶので開システムとしてシステムの形式は保存されることになる。

それではこの関係はどのようにして実現可能となるであろうか。抽象的に、あるいは静態的に見れば、この関係の成立は構造の合成である。問題はシステム間の合成の可能性である。そのためには閉システムには開システムが、開システムには閉システムが対応しなくてはならない。閉システムどうし、あるいは開システムどうしでは合成不能である。或る閉システムのインプットやアウトプットは開システムの存在を前提とし、また逆のばあいには逆であるが、それを「環境」としてひとまず把握しようとしたのがルーマンの「システム・環境理論」であった。しかし、合成が実現されるためには環境のなかに所要のシステムが存在しなくてはならない。「環境」はシステムではないというルーマンの主張を認めるとしても、「環境」のなかに開か閉のシステムが必要不可欠である。こうしたシステム相互の関係づけは「連結」とよばれるであろう。また、複数のオートポイエシス・システムが「連結」できる条件は一方が閉、他方が開としての機能を果たしうるようなコミュニケーション状況が存在することである。数学的に表現すると、特定のシステムと（「環境」の部分集合としての）システムとのあいだで、いわば「連結空間」が構成されているということにな

る。たとえば、日常生活ないし「家計」のシステムはマイクロ閉システムと見なされ、資本主義システムはマクロあるいはマイクロの開システムと見なされうるから、両者は直接に「連結」できるのである。

- (1) ルーマン『社会システム論』S. 61, 邦訳(上) 55 頁.
- (2) 同, S. 62, 邦訳(上) 55 頁.
- (3) 同, S. 62, 邦訳(上) 56 頁. 傍点は原文がイタリックであることを示す.
以下, 同様.
- (4) 同, S. 60, 邦訳(上) 52 頁.
- (5) Niklas Luhmann, *Die Wirtschaft der Gesellschaft* (Suhrkamp, 1988),
S. 49. 以下では『社会の経済』と略称して引用する.
- (6) *Ibid.*, S. 50.
- (7) この表現の含意については, 前掲拙稿「社会的な場とコミュニケーション構造」参照.

III メタ経済学的な分析への視座

[1] レギュラシオン

レギュラシオンの定義については, それをシステムに関連づけて定義したロベール・ボワイエ (Robert Boyer) の定義が有用であろう. 彼はレギュラシオンを称して「経済諸構造の状態や社会諸形態を考慮したうえで, システムの総体的再生産に向かって協同的に作用しあう諸メカニズムの結合体⁽¹⁾」であるといっている. ボワイエのこの定義はきわめて多義的である. どのようなメカニズムがいかにして「結合」できるのだろうか. またそれがシステム「総体」の再生産をどのようにして可能にするのだろうか. こうした論点についてレギュラシオニストたちの議論には記述的なあいまいさが目立っている.

まず, メカニズムの概念を規定しよう. メカニズムは, 三木清が『技術

哲学』のなかで紹介しているような「強制運動」としての特徴をもっている⁽²⁾。すなわち、システムの概念で置き換えれば、個別システム単位のアウトプット (O) が別の個別システム単位のインプット (I) となっているような連鎖関係によって最も的確に表現される (ただし、最初のインプットないし初期入力 I_i は不可欠である)。すなわち、

$$I_i \rightarrow OP \rightarrow O = I \rightarrow OP \rightarrow O = I \rightarrow \cdots \rightarrow O_f \text{ (最終出力)}$$

という具合に記号化される (OP はオペレーターを意味する)。ここに表現されたメカニズムは有限の時間順序的な列を表現し、初期入力と最終出力との分離した構造を示しているが、いまひとつの類型を設定することも有用であろう。それはIIで示した「閉じた」メカニズムである。すなわち、循環するシステムとしてのメカニズムである。このメカニズムが閉かつ開のシステムを形成している状況が再生産されるケースを、ルーマンはオートポイエシス・システムという表現で記述したのである。そのばあい、メカニズムの「結合」は構造の合成として表される。もっと一般化すれば、メカニズムの「結合」は圏論的に関手の合成として表現可能になる。いわゆるレギュラシオン派の問題提起はこのような理論的見通しのもとに一段と精密な形で定式化できるだろう。

[2] 経済科学のシステム

ルーマンは『社会の経済』のなかでつぎのようにいっている。

「諸経済科学が科学たろうと要求するかぎり、それら自身は社会的に独立化したオートポイエシス・システムの部分である。その基底的なオペレーションは認識利益 (der Erkenntnisgewinn) である。それらは認識から認識を生産し、また他の認識との再帰的な関係のなかでこうした性質を受け継ぐことのできるものに認識としての資格をあたえる。」⁽³⁾

このばあい、「諸経済科学」とはいろいろな経済理論システムの、構造化されていない集合と見なされるので、ひとまず経済理論オペレーターと総称できる。そこで、この経済理論オペレーターの作用するオートポイエシスの具体的構造を見よう。

まず、経済システムに対するコギタチオの担い手としての「理論生産者」、すなわち経済学者たちがインプットとして現れる。当面の議論とのかかわりでは、ケネー、マルクス、レオンチェフ、スラッファなどが挙げられよう。彼らはある種のメタファー（ルーマンの表現）を駆使して理論を「生産」する。最も典型的な理論システムは経済表や再生産表式や産業連関表に例示されるような循環システムである。それは数学的な構造として群によって表現されるので、それらの類型は群の圏を形成する。しかし、別の型の理論システムも存在しう。それらは「拡大再生産」や「成長」のメタファーによって構成される。この型の理論システムは数学的構造としては半群によって表現される。⁽⁴⁾ そのばあい、経済理論オペレーターの内部では一種の関手が作用していると考えられる。それは群の圏に経済的な意味での「蓄積」という契機を付加するので、「蓄積関手」と称されよう。「蓄積関手」を——まったく叙述的な形式においてではあるが——問題化したことこそ、レギュレーション派の功績である。

ところで、経済理論オペレーターの生起させるアウトプットはなんだろうか。それはさまざまな経済政策的イデオロギーである。たとえば、資本主義的経済計画論や社会主義的計画経済論あるいは後進国経済開発論（リンケージ「理論」）などが想起されよう。このばあい注意されなくてはならないのは、それらのイデオロギーが経済的現実を修正して別の「現実」を産出することである。そうした「現実」たちの集合は新しい経済理論のモデル——数学基礎論の「モデル理論」における意味でのモデル——となる。そこに成立する諸モデルに対して再び経済的コギタチオが生成し

てくる。それは経済理論オペレーターを形成する新しいインプットとなる。こうして一種の「自己準拠」的運動が現れ、経済を対象（「環境」）とするひとつのオートポイエシス・システムが出現することになる。

- (1) ロベール・ボワイエ（山田鋭夫訳）『レギュレーション理論』（新評論，1989年），259頁。
- (2) 三木自身は「機構（Mechanismus）」を「因果論と目的論との統一」として規定しているが，そこに機能的な解釈が加えられないかぎり，さらに立ち入った分析的意味をその概念から引き出すことはできない。彼の議論の詳細については、『三木清全集』第7巻（岩波書店，1967年）241頁以下，参照。
- (3) ルーマン『社会の経済』S. 75.
- (4) 以上の理論的定式化については，拙著『経済学の構造』（未来社，1996年）および拙稿『『姿態変換群』の構造転形』（『一橋論叢』1998年12月号，所収），参照。

第4節 システムと機械

人間との関連でシステムと機械とをどのように区別し，また関係づけるかという問題，さらにその論点をふまえて人間はシステムの開閉性を自在に駆使してオートポイエシス・システムの担い手となりうるかという問題の解明が本節の主題である。人間がオートポイエシス・システムとしての自己自身をどのように統御するかという問題もまたそこに含まれている。

I システムと人間の退化

ひとまず，制御可能なシステムとして機械を定義することによって議論を展開させることにしよう。

人間をシステムとして見れば，人間は機械である。機械が人間でないの

は、機械には具わっていない能力が人間にある（と人間によって仮定されている）からである。そのことから機械以上の、あるいは機械を「超越した」人間、メタ機械としての人間の理念像が描かれるかもしれない。しかし、そうした像を求める努力をぬきにしては人間は人間でありつづけることができないだろう。

ところで、別の角度からシステムとしての人間を捉えることもできる。無数の情報（メッセージ）と情報の接続（コミュニケーション）が日常におこなわれている状況のもとで、人間はシステムとして、あるいは機械として存在しつづけることすら困難になりつつある。情報源としてのマスメディアやコミュニケーション手段としての電話が巨大な規模の情報「空間」を構築してしまった今日では、多くの人間はつねに、しかも一方的に情報を取り入れている。家にいるときにはテレビを見ているだけで時間を費やし、職場ではコンピューターを所定のルールにしたがって操作し、仕事を離れたところでは携帯電話の画面を見るかイヤホンで音楽を聴いている、そうした人間の日常的行動はけっして例外ではなかろう。システムという観点から見ると、この生活パターンはなにを意味しているだろうか。人間はひたすら情報というインプットを取り込み、しかもアウトプットとして彼らにもたらされるのは職場で受け取る賃金だけであり、ほとんどのインプットを自己の内的なオペレーションの対象にしていない。彼らはシステムとして著しく奇形な様相を呈している。というのは、インプットを処理するオペレーターの働きは（職場労働に限定されているので）きわめて小さく、ほとんどのインプットは吸収されたままで終わるからである。それはあたかも、光を吸収するばかりで外に出さない「黒体」のような機能を示している。「黒体」となったシステムはシステムとしての機能を果たしえないから、もはやシステムではない。したがって人間が「黒体」となったとき、人間は機械以下の存在でしかなくなる。人間はシステムとし

て退化することになる。マルクスは資本主義のもとでの「労働者」の極限的像として、過酷な労働から「解放」されたときには酒に溺れるかセックスに耽るか博打にのめり込むかするほかになにも残されていないような、非人間的「人間」を想定しているが、そのような「道徳的頹廃」をシンボル化して労働者に「肩入れ」しなくとも人間の退化を理論的に説明することは十分にできるはずである。しかし注目しなければならない論点は、退化した「人間」は社会を「変革」するどころか、維持することさえできなくなるであろうということである。

II 「自由機械」論

「自由機械」という概念を介在させて機械とシステムとの直接的な概念的比較を試みることにしよう。ここに「自由」とは liberty を意味するのではなく、「コントロールされていない (uncontroled)」状態を意味している。その点でレッセ・フェールという意味に近い。しかし、コントロールには「支配」という意味も含まれているので、「支配」と「制御」との双方の状態をもつ言葉としてコントロールは用いられるであろう。この表現の経済的意味は度外視して、ここでは「自由機械」の一般的概念だけを定めておこう。通常の人間の生産活動を機械のそれと同一視すれば、その機械はインプットは同じでも廃棄物をアウトプットとする「機械」と見なすこともできる。このような観点の置き換えによって「本来の目的論的構造の外側に、意図されない入力出力関係が生じ」ていることがわかる。この「機械」を私は別の論文で「自由機械」と名づけた⁽¹⁾。数学的な表現をすれば、「自由機械」とは機械の双対としての機械である。

ところで、具体的生産を担う機械、端的に具体的機械はシステムとおなじく半群構造をもっているが、抽象的生産を担う機械、すなわち抽象的機械は群構造をもつ⁽²⁾。したがって抽象的機械は可逆的システムないし閉じた

メカニズムと見なされる。それでは機械とシステムとのちがいはどこにあるだろうか。それは概念的にどのように規定されうるだろうか。「機械はシステムである」という命題はただしい。すなわち、システムは機械の上位概念である。他方、システムは必ずしも機械ではない。制御可能性という条件のついたシステムこそが機械である。したがって、端的に、機械とは制御可能なシステムである。たとえば、太陽系はシステムであるが、人間の力を含むなんらかの「外力」によって制御されえないとすれば機械ではない。それでは、もし太陽系を制御できる力があれば太陽系は機械であろうか。否である。なぜならば、直接的にせよ間接的にせよ制御には人間の意識的な行為が含まれなくてはならないからである。制御の概念規定においては、人間を超越した存在の意識や意志は前提とされない。すなわち、制御の「主体」はあくまで人間でなくてはならない。逆に、ミクロの粒子（素粒子）の運動は人間によって制御可能である。その典型は核兵器である。その意味で核兵器は機械である。大量殺人というアウトプットをもたらす機械＝システムである。

図式化すると、

$$\text{機械} = \text{システム} + \text{制御可能性}$$

という「等式」が成り立つ。さらに、「自由機械」を使って書き換えれば

$$\text{機械} + \text{「自由機械」} = \text{システム}$$

となる。

「自由機械」のいくつかの基本的な例を示そう。まず、「公害問題」の主役となる「廃棄物産出オペレーター」が考えられる。それは制御主体の意思を反映するかぎりでは諸機械の集合であるが、機能的にはその意思を逸脱して「廃棄物産出オペレーター」として作用することになる。それらは経済システムの枠組みをはみ出して社会システムや自然システムを破壊するアウトプットの累積をもたらす。それは特定の内部システムの「独立化

(3)
 (Ausdifferenzierung)」による総体的システムの否定、あるいは別種の部分システムの否定に繋がる。つぎに、社会的には「悪」と評価される意思を働かせて「自由機械」を操作するばあいが問題となる。その典型例はいわゆる「コンピューター・ウィルス」である。それは機械のオペレーターを利用して機械のシステム的な機能麻痺を引き起こす役割を演ずるので、制御を目的としたネガティブ・フィードバックとは異質の、あるいは正反対のオペレーションを担う。刑法上の犯罪に多くの興味深い事例が見出されるような、合法的に法律システムを毀損する行為もまた同様の機能を果たすであろう。その種の「合法的な行為」は法律システム、より正確に言えば実定法システムが構成されたときの本来的な社会的意思を否定する結果を招き、ひいてはそうしたシステムに対する社会的な信頼感を喪失させることになる。「民主主義」と名づけられている社会システムのルールもまた、現実には「多数派」獲得ゲームのルールとして機能し、その運用しただいでは当該システムは痙攣を引き起こしかねない。これらのケースはシステムによるシステムの自己否定であって、システムの「自己準拠」性のネガティブな局面を表現している。とくに問題となるのは当該システムの内部にはその内部に生じた「ウィルス」——じつはヒト——を「駆除」する装置はもともと組み込まれていない点である。おそらく、必要におうじて外生的な「対症療法」が講じられるほかはないのであろうが、「ウィルス」自体を再生産するプログラムも当該システムが「自由機械」として機能することによって「案出」されつづけるので、「耐性ウィルス」がつぎつぎに産出される結果となる。

こうした見通しをさらに一般化してみよう。いま、システムのオペレーションをつうじてシステムの否定につながるようなシステム内部の要素を「自己否定因子」と名づけることにする。ちょうど或る論理システムの内部にそのオペレーターにしたがって構成された命題があって、しかもそれ

がそのシステム内部の論理的オペレーションによって肯定も否定もできないケースが考えられうるように、「自己準拠」的に構成されたいかなるシステムのなかにもそのシステムのオペレーションそのものを否定する結果を招きうる要素が形成可能である。それが「自己否定因子」である。一般の「社会システム」においてはこの種の「因子」はたえず生成し、そのたびごとにそれに対するスキャン装置が案出され除去オペレーションが実行されている。いわゆる「人員整理」や「合理化」や「粛清」の機能のひとつがそこに見出される。「自己否定因子」が蔓延すればシステムは不安定化し、ばあいによってはなかば自然発生的な「革命」が生じうる。その結果として成立する新たな「社会システム」は「反革命」という形でふたたびおなじ運命をたどるかもしれない。いずれにしても、それはシステムのひとつの運動局面にすぎない。また、「自己否定因子」が増大しても「革命」状況が生じないケースもありうるだろう。それは特定の「社会システム」が、後述のようなコーポレーション化という方向に進むばあいである。そこに登場するのは意識的なシステム破壊につながるポジティブな「自己否定因子」ではなく、ネガティブな、なかば無自覚的で無節操なそれである。むしろこのほうが結果的には深刻なシステム閉塞を惹起しうる。このケースでは当該システム本来の目的論的構造が喪失されてシステムの「自己保存」が文字通り自己目的化するであろう。

- (1) 拙稿「産業革命の構造 (I)」(『一橋大学研究年報 経済学研究』第 44 号, 2002 年, 所収), 140 頁, 参照。
- (2) 具体的生産と抽象的生产との区別については, 前掲拙稿「『姿態変換群』の構造転形」, 参照。
- (3) この表現は「差異化」あるいは「自律化」とも訳出できる内容をもち, ルーマンの前掲書『社会の経済』に頻出してくる。そのばあい, 問題とされるのはシステムとしての経済の「独立化」である。

III 人間の単能機械化

人間は最もすぐれた万能機械と見なされる。その意味で理性的な存在である。人間の理性が或る形をとるとき、それは構想力とよばれる。哲学者三木清はそれを「技術的理性」と名づけている。⁽¹⁾

人間の思惟の対象を構造として捉えるとき、構想力はどのようなものとして規定されるだろうか。それは諸構造の合成能力にはかならない。前述のように、それをシステムの「接続能力」に置き換えればオートポイエシスということになるであろう。このような視点から把握された構想力とくに認識力とよんでおこう。⁽²⁾人間は認識力によって機械を対象的な存在として意識し、さらにはそれを操作することができる。その意味で認識力、さらに広く構想力は人間を機械から区別する根源的な標識と考えられる。構想力をつうじて人間は自己を人間として定立しうるのである。

ところが、人間の「発展」や「進化」はその双対として「衰退」や「退化」をともなっている。それを最も顕著な形で示した歴史的「事件」は「産業革命」である。その過程を経由するうちに人間は本来の認識力を徐々に喪失し、ついには一種の単能機械にすぎなくなってしまったように見える。⁽³⁾どのような問題に対しても執務規則（法律）に矛盾しない定型的な「解」（不能解を含めて）を出すことしかできない役人、狹隘な専門領域にかんする知識の操作に汲々として「学際研究」というお題目しか唱えられないでいる「学者」（「専門馬鹿」！）、イノベーションの能力を欠いた、恐ろしく「保守的」な企業「経営者」等々、さまざまな部面で人間の単能機械化が進行してきたし、いまなお進行しつつある。このような状況を打開する方法はあるだろうか。おそらく、ありえないだろう。なぜならば、単能機械化した人間が社会の「多数派」をしめる傾向は着実に強まっており、その傾向を逆転させうる人間、すなわち豊かな認識力を具えた人間は偶然的な社会的存在にすぎなくなっているからである。後者の人間

「類型」はますます小さくなる「少数派」を形成するばかりなので、いずれは社会のなかにその姿を没する運命にある。まさに「この世のことは、⁽⁴⁾とてもかくても候」と嘆ずるほかなくなる。

(1) 前掲『三木清全集』第7巻, 229頁。

(2) この表現の含意については、拙稿「価値の構造」(『一橋論叢』2003年12月号, 所収) 参照。

(3) このプロセスの理論的評価にかんしては、前掲拙稿「産業革命の構造 (I)」および拙稿「産業革命の構造 (II)」(『一橋大学研究年報 経済学研究』2003年第45号, 所収) を参照せよ。

(4) 『一言芳談』より。

IV 「遊び」と機械

「自由機械」ではなく「自由人間」が存立しうる可能性をもつ領域として、最後に「遊び」の構造を考察しておこう。

「遊び」についてはこれを三つの類型にわけて整理することができる。第一は本気でない遊びである。たとえば、「彼女とは遊びで付き合った。」とか、「今日のハイキングは遊びであって登山ではない。」とか「彼は遊び人だ。」という表現に見出される遊びである。第二には自由としての遊びがあげられる。たとえば、「価値自由」という立場から学問するということは遊びとして学問することである。また「この歯車には遊びがない。」といういい方にもおなじような「自由」が含まれる。賭金なしで麻雀を楽しむばあいや、庭掃除とか散策といった、他人のためでも営利のためでもない労働にもこうした「自由」が見出されよう。第三の型は規則のある遊びである。いろいろなゲームがその典型例である。ゲームのドイツ語は Gesellschaftsspiel であり、それは社会遊びである。ただし、賭金を設定することはゲームの遊びとしての性質を制限する。「ゲームの理論」にお

ける「利得関数」はまさにこの典型であり、「利得関数」によってゲームの遊び性は損なわれることに注意すべきである。

ゲームにかんしては重要な補足が必要である。いわゆる「パラダイム」にそくして、その範囲内において論理的に可能な研究の「規則」(理論)をつくることが科学であるとすれば、科学はゲームである。⁽¹⁾ とくに、「利得関数」に制約されないという意味で「純粋な」科学、たとえば数学や理論物理学は遊びの要素を残したゲームとしての科学である。ここから、ゲームと遊びとの区別が生ずる。すなわち、遊びとしてのゲームと遊びでないゲームとの区別である。ゲームを遊びでなくする契機はなんであろうか。二つの契機が考えられる。すなわち、「利得関数」のような、ゲームの自由性をそこなう外生的な制約条件、さらに、「遊び」の抽象化・形式化、の二つである。数学者フォン・ノイマンは「遊び」を数学的に抽象化・形式化し、つぎに経済学的な目的論的構造をそこに(「利得関数」という形で)導入した。⁽²⁾ その結果えられた、厳密に論理的概念が「ゲーム」にはほかならない。それは具体的なゲームではなく抽象的なゲームである。ゲームが抽象化されることによって遊びでないゲームの概念が可能となった。このようなゲームをカギ括弧を付して「ゲーム」と表記しよう。

広い意味で遊びとは認識主体としての人間が自己の認識力の範囲内で、自己が人間であることを意識する手段である。歴史家ホイジンハ(Johan Huizinga)の案出した「ホモ・ルーデンス」という名称はこうした人間観を反映している。したがって、遊びは「自由機械」——あるいはおなじことに帰着するが、機械でないシステム——としての構造をもつので、それ自体ひとつのシステムと見なされる。そのばあいのオペレーターは「遊びの規則」(より限定的にはゲームのルール)である。インプットおよびアウトプットを形成する要素には人間以外に自然も含まれるであろう。ところで、「遊び」のシステムから自由性が喪失されるにつれ、換言すれば、

「遊び」のシステムが機械化されることによって、それは抽象的なゲームとしての「ゲーム」になる。当然のことながら、「ゲーム」は機械（ロボット）によっても実行可能である。

(1) この間の事情をとくに強調した好論文として、P. Nolfi, 'Strategische Spiele', in *Dialectica*, Vol. 23, 1969, 参照。

(2) J. von Neumann, 'Zur Theorie der Gesellschaftsspiele', in *Mathematische Annalen*, Bd. 100, 1928, 参照。

第5節 コーポレーション・システムの諸問題

I コーポレーションとコーポラティズム

まず、コーポレーション (corporation) の定義からはじめよう。コーポレーションとはつぎの二つの条件を満たす社会的団体であるということが出来る。すなわち、

[1] その内部における運動はすべてその構造的特質（構造を規定する関係）の保存に帰着すること、その意味でオートポイエシス・システムであること、

[2] 構造を否定する諸契機に対しては「二重否定の除去」が適用でき、それらの契機を否定すれば、それらが存在しないのと同様の状況を回復できること、

である。[1] はルーマンのいう「システム合理性」の極限状況を示している。というのは、その条件の充足はオートポイエシスの自己目的化を意味しているからである。[2] の条件はコーポレーションというシステムの「反進歩」性や「反発展」性を、逆にいえば、停滞性や保守性を保障するものである。「粛清」や「弾圧」や「虐殺」はその意味でこの条件の充足

行動にほかならない。それは人間によっておこなわれるというよりも「諸行為」の機械的集合によって実行される。システムの言葉で [2] の条件をいい換えれば、それはシステムのオートポイエシスと矛盾するコードを棄却することを意味する（もちろん、コード棄却機能をも含めてオートポイエシスを定義することもできるが、ここでは [2] の条件を強調するためにそれをやや狭く規定しておく）。「有害」ではあっても棄却を必要とするほどでないあいには、社会的に「絶縁体」が準備され特定のコードやその担い手は孤立化させられて、社会の「少数派」（「異端」）の不満の捌け口としてのみ——そうした「有用性」の範囲内で——存続が許されることもありうる。

つぎに、コーポレーションの諸類型を概括しよう。コーポレーションに含まれる社会的団体の諸類型は以下のようなものが考えられる。すなわち、第一にあらゆる「価値団体」⁽¹⁾（宗教団体、政治団体〔特定の政党〕、「翼賛」団体など）、第二にギルド組織（商人ギルドまたはツンフト）、第三にファシズムのもとでのさまざまな組織（シンジケートなど）、そして最後にアウトローの多様な形態（暴力団の「組」組織、マフィアなど）、である。これらのコーポレーション形成への運動に関連してひとつの用語を与えておくと便利であろう。そこで、コーポレーションに指向する理念および運動をコーポラティズム（corporatism）とよぶことにする。コーポラティズムの典型的な形はファシズムによって代表される。ファシズムは資本主義の欠陥を内部的に補修し、同時に資本主義の否定が「左翼的」社会主義と結びつくような、すべての運動を否定する。この関連で、ドイツのファシズムを「同時代の視点」から分析した「古典的」著作であるノイマンの『ビヒモス』⁽²⁾に言及する必要があるだろう。その歴史主義的著述は、自らが生きている現実を対象化して把握する、その意味で「同時代史」的な対象把握をおこなうことがいかに困難であることを示している。というのは、ノイ

マンがそのなかで用いた用語法はほとんど破綻し、したがって理論的な分析に失敗しているからである。「独占資本主義」とか「段階」とか「階級対立」といった言葉は、あたかも宙に浮かんでいるかのように目の現実的事態の表層を撫でているにすぎない。国家を呑み込むほどに巨大化したツンフトを彼がイメージできていたら、おそらくはもっと根源的なナチズムの深層に達していたかもしれないが、彼でなくともそうした視座の設定は不可能であつたろう。そのことは歴史主義的「歴史学」の限界を明瞭に示している。

いずれにしても、ファシズムにその具体的な表現を見出すコーポラティズムにはさまざまな変種がありうる。たとえば、tripartism を基本原理とする neo-corporatism, スターリニズム,あるいは擬似ファシズム的な「右翼全体主義」(米国のマッカーシズムや neo-conservatism など)が想起されよう。これらのうちで、ネオコーポラティズムは、たとえば英国では「右翼全体主義」的な権力によって打倒された⁽³⁾。このことは特質に値する。というのは、コーポラティズム的な性格の希薄な「右翼全体主義」が「左翼的要素」に左右されるコーポラティズムを否定したからである。その結果、英国の資本主義システムは「活力」を与えられたのであった！

これらのコーポラティズムの具体的な形態に加えてサンディカリズムとコーポラティズムとの語義的な関連にもふれておく必要がある。フランス語の le syndicat は「組合」と訳されるが、それは労働組合でもあり経営者組合でもあり産業組合でもある。したがって、syndicalisme においては syndicat は trade union に限定され、その結果、労働組合主義という訳語があてられる。しかし、syndicat は英語でいうシンジケートの意味も含まれている。その言葉は企業のシンジケートだけでなく「マフィア」のシンジケートをも意味する。このように見てくると、組合一般——「組合」と表現しておく——はすべてコーポレーションに還元される。もちろん

ん、「組合」についてはその形容詞におうじてさまざまな意味解釈ができるだろうが、諸々の「組合」に共通する構造を理論的に分析するにはコーポレーションという表現が適当かもしれない。他方、コーポレーションには政党組織や国家機関、さらに国家のシンボル（「国体」）も含まれるので、かなり広い具体的・歴史的内容がそれに対しては与えられなくてはならない。その具体的様相をここで歴史家的に記述することにはあまり意味がないだろう。私が以下で論ずるのは——たとえ、具体的事例に言及しているとしても——あくまで普遍的に意味づけ可能なコーポレーションのシステム的特質である。

- (1) 「価値団体」の正確な定義については、前掲拙稿「価値の構造」を参照せよ。
- (2) Franz Neumann, *Behemoth: The Structure and Practice of National Socialism*, London, 1943.
- (3) ネオ・コーポラティズムの展開にとって理念的な意味で「議会の衰退」という契機は欠かせない。実際に、傑出した社会学者のひとり平田清明が晩年の著作で語ったように「議会の衰退はたんに行政官庁の権限強化によって収束するのではなく、一種の社会的コーポラティズムの成立を必要とする」のである（平田『市民社会とレギュレーション』、岩波書店、1993年、300頁）。

II コーポレーションとオポチュニズム

オートポイエシス・システムとしてのコーポレーションという形式的規定から問題をさらに展開させよう。コーポレーションを維持するうえで最も適切的な思想的態度はオポチュニズム（日和見主義ないし機会主義）であるから、この側面から当面の課題を考察することにしたい。

[1] オポチュニズムの問題

個人が特定の「価値団体」内部あるいはそれとはカテゴリーを異にする

社会的団体内部でオートポイエシス（「自己保存」）に専心する思想ならびに行動を「オポチュニズム」と名づける。オートポイエシスというのは、ミクロ的には社会的人間というシステムとしての自己（「個人」）を防御することをも意味している。すなわち、集団内でつねに「多数派」に所属しようとする指向をもち、ばあいによってはそのために集団内での身分状況を改善する行動をとり、この行動に障害となる他者を排除する（そのために告げ口や噂・風聞を利用する）、あるいは当該団体における地位保全のため自己の所属する他の集団の機能を活用する、などといった行動様式をつうじて自己防衛に努めることがミクロ的オートポイエシスの具体的現れにほかならない。

そのばあい特徴的なのは、団体を原理的に規定する理念・思想・信条・秩序意識にこだわることなく「自己中心」的オートポイエシスが追求されるという点である。その意味でオポチュニズムは個人主義的な理想主義やロマン主義と相いれない。むしろそれは、もっぱら悪い意味で現実主義に近似する。現実主義しかない現実主義がオポチュニズムであるといってもよからう。「もう少し大人になれよ」といった慣用的表現はオポチュニズムを行動「原理」とする人間、つまりオポチュニストに特有の発想法である。彼にとって理想を追いか求めたり過去を懐かしんだりする者は「こども」であるか「年寄り」である。この「大人」はアイデアやプリンシプルにあまり関心はなく、「自己中心」的オートポイエシスのための「戦略」が彼の主要な関心事である。丸山眞男の規定しているように⁽¹⁾、理念的な立場を根底にもちながら合理的な戦略判断にもとづいて臨機応変に状況を見極め行動する立場を「相対的」オポチュニズムと称して、オポチュニズム一般ないし「絶対的」オポチュニズムと区別することも可能であろうが、組織のオートポイエシスが問題化したときに「相対的」オポチュニズムを維持することはきわめてむずかしい。このようなオポチュニズムを実践した

思想家の典型は福沢諭吉——そして、丸山眞男——である。しかし彼らの思想的態度は稀有の例外的事例に属しているので、当面オポチュニズムの「相対性」は度外視しておいたほうがよからう。

要するに、オポチュニストの行動パターンは「戦略ゲーム」のプレイヤーにきわめて類似している。システムとして見たばあい、社会的集団はそれ固有の「ゲームの規則」をもっている。その規則にしたがって集団は集団としてのオートポイエシスを実現していく。すなわち、集団はその存亡にかかわる「問題」を解決したり凍結したり消去したりするのである。日和見主義者はこのなかで最も巧みなプレイヤーとして生きることを「理想」としている。彼は戦略家であり、またときには「偉大な」戦略家でありうる。しかし彼はつねに「二流の人」である。なぜならば、彼は戦略家としてしか生きられないからである。集団の「多数派」の多くがこのようなオポチュニストになったとき、その集団はどうなるだろうか。ここには社会集団のかかえる根源的な、ある意味で致命的な問題状況が現れている。

[2] オポチュニズムと「無知の無知」状況

いま、知識人集団として学会を考えよう。ここでは、つぎのようないくつかの条件を設けて「学会」という知識集合（「理念型」）を想定する：

条件(1) 科学的知識は分離可能であって、特定の知識の集合は共通部分をもたない複数の集合に分割できるものとする。おのおのの知識の集合を「学会」と名づける。

条件(2) 「学会」には加法半群という代数構造が入っている。すなわち、要素としての個々の知識について特定の「学会」の内部では「加える」（「加算」する）ことができる。その意味での有限集合が「学会」である。

条件(3) 特定の「学会」に含まれる知識がその要素となるためには、したがって「加算」できる要素となりうるためには、その知識はトーマス・クーンが「パラダイム」と名づけた「範型」を満たさなくてはならな

(2)
い、

いま、「パラダイム」の保存（自己目的化された「パズル解き」⁽³⁾）を「利得関数」とするゲームを考えよう．そのばあい「利得関数」は機能的には「学会」の「自己保存」に対応する．すなわち、「学会」は特定の時間経過のなかで知識の純増加（既存の知識とは区別される知識の「創造」）を実現しつづけなくてはならない．そのためにはこの「学会」を担う少数の「生産的」知識人がいれば足りる．あとはオポチュニストから成り立っていると想定すれば十分である．彼らは、時として知識の創造とは無関係に「パラダイム」の保存に努めればよい．もちろん「パラダイム」そのものの科学的評価は許容されない．このような「学会」への科学的知識の分割は、相互に無関係に、しかも自律的に「学会」存続の時間経路が維持されるための条件となる．ここでは「共通部分」をなくすことが「学会」存続の条件なので、「学際」はありえない．「学際」を想定した途端、じつは単一の「パラダイム」に規定される一つの「新しい」「学会」が「合併」によってできあがるにすぎない．

ここに描かれた状況こそ、いわば「無知の無知」状況を促進する起点となる．なぜならば、知識の創造に与ることができなくとも（日和見主義者として）「学会」の担い手になりうるし、自己の属する「学会」団体の「パラダイム」に関係しない知識はすべて不要となるからである．このばあい「パラダイム」は「学会」の形式を規定するので、丸山眞男が「タコツボ」とよんだものと類似している⁽⁴⁾．すなわち、「パラダイム」形成は「タコツボ」化でもあるだろう．それでは「学会」とはいかなる構造をもつものと規定できるであろうか．すでにクーンが「科学」を「科学者集団」のありかたから特徴づけようとする観点を提示していることは周知であろう．その意味で「学会」はひとつの「科学者集団」にはかならない．それではその「集団」はどのように構造化されうるだろうか．以上の議論

の組み立て方からすでに推察されるであろうが、「学会」こそは典型的なコーポレーション・システムなのである。

このような「学会」のコーポレーション化への趨勢を一段と強化するのは「パラダイム」それ自体のオートポイエシス・システムへの転化、端的にオートポイエシス化である。なぜそうなるのであろうか。クーンの定義によれば、「科学革命」は「パラダイム」の変換プロセスであった。しかし、このプロセスそれ自体は新しい「パラダイム」を生成させる契機をなんらもたらしはしない。その点で「科学革命」そのものが新しい「パラダイム」形成の土壌となりうるかどうか、まったく不確定である。そこで「科学者」たちは「革命」の「不毛性」を予測し、その判断にもとづいて「パラダイム」そのものを——その科学的意味内容の合理性や実証的妥当性とは無関係に、当の「科学」が消滅するまで！——「死守」しようとするだろう。いい方を換えれば、彼らはシステムとしての「パラダイム」のオートポイエシスに専心する。それこそは「パラダイム」のオートポイエシス化にほかならない。「科学」の直面するコーポレーション化とオートポイエシス化との複合は回避できるであろうか。「科学者」が神ならぬ人間であるかぎり、それは不可能に近い。

- (1) 丸山眞男が事典の一項目として執筆した小文「オポチュニズム」(『丸山眞男集』第6巻、岩波書店、1995年、所収)を参照。
- (2) クーンにおける「パラダイム (Paradigm)」という言葉の用語法は必ずしも一義的ではない。ここでは「通常科学の構造 (structure of normal science)」を構成する諸要素と諸関係の全体を意味するものとしておこう。詳しい議論については、Thomas S. Kuhn, *The Structure of Scientific Revolutions* (2nd ed. Chicago, 1970) の関係箇所を参照。
- (3) *Ibid.*, Chapter 4, 参照。
- (4) 丸山眞男『日本の思想』(岩波新書、1961年)、参照。

第6節 「社会的エントロピー」の概念

I コーポレーション・システムの「宿命」

コーポレーション・システムは、およシステムに還元できるあらゆる人間組織の収斂する極点を示しているという仮説が前節の叙述のなかには暗示されている。なんらかの組織がその成立根拠を喪失する可能性をつねにもっているという傾向は、かりに組織のなかに一種の「生命」を仮定してその「生命」維持機能の特性を追跡したとすればかならず発生してくるにちがいない「宿命」を告知している。すなわち、組織のもつ「生命」のエントロピーが増大するということである。そのとき、組織は「負のエントロピー」を吸収するほかには機能しえなくなる。その機能が自己目的化されることこそ、組織の「自己保存」、したがってコーポレーション化なのであった。

そこで、コーポレーション化の意義をもっと明確にするためにひとつの概念を導入しよう。それは「社会的エントロピー (social entropy)」という概念である。この言葉を体系的に論じて社会学的分析の基本的なカテゴリーとして位置づけたのはアメリカの社会学者ニスベット⁽¹⁾である。彼はそれを「人間的エネルギー (human energies)」が無駄になる尺度として考察し、とりわけ重要なその発現形態として「疎外 (alienation)」、⁽²⁾「アノミー (anomie)」および「逸脱 (deviance)」をあげ、とくに「疎外」を「エネルギー撤退 (withdrawal of energy) の一形態」として規定している。これらの用語はいずれも人間の個人行動の特性に帰着させる形で、いわば基底還元的に定義されている。そのために、彼の用いる「人間的エネルギー」あるいは「エネルギー撤退」といった用語はきわめてあいまいなものとなってしまう、その結果、「社会的エントロピー」という概念の

有効性は大きく削がれてしまった。この言葉は統計力学的な定義に近い形式的規定にもとづいて人間社会に適用されるべきであろう。その意味するところは、ひとまず、社会の「無秩序 (disorder)」化ないし「解体 (disorganization)」の度合いである。⁽³⁾ そのばあいの前提として物理的に運動する粒子に近似した存在として「人間」が規定されなくてはならない。それは自由に生命活動——端的に運動といってもよい——を展開する存在であって、その自由を阻害する対象を除去し、またその自由と矛盾しない運動の規則——「行動原理」といっても「価値規範」といっても機能的にはおなじである——を「自己保存」のために創出するシステムである。この「人間」概念にはいわゆる性悪説とか性善説とかいった古めかしい価値規範は含まれていないことに注意されるべきである。むしろ「人間」は特定の運動特性をもつ素粒子に近い「形式的」存在と見なされている。社会を構成するこのような「人間」群の非「人間」的な、その意味で「社会的」(人間的!) な行動がとられなければ、「社会的エントロピー」は増大の一途をたどるだろう、という命題が成立するのではなからうかというのが私の予想である。後述するように、トマス・ホッブズは私がここで規定した「人間」概念に類似の「人間観」にもとづいて「社会的エントロピー」が増大しきった状況を起点に社会(文明)の秩序の意識的な形成の必要性を訴えた最初の人物であった。彼は社会のなかに、いわば「負のエントロピー」を注入しようとしたのである。結局のところ、ホッブズの時代以降多少の紆余曲折はあったものの、趨勢として「社会的エントロピー」は増大しつづけている。国家から人間にいたるまで社会を構成するさまざまなシステムのコーポレーション化は多種多様の閉システムが「自由に」存在して相互に「連結」しない状況に帰着するので、それは「社会的エントロピー」がある「臨界値」に向かって接近する事態を意味する。

こうした見通しにもとづいて、事態をいますこし詳しく、しかし総括的

に検討することにしたい。そのばあい、課題は二つに分けられる。第一は、生命のエントロピーと社会のエントロピーとの類比がどのようにして正当化されるか、という論点を示すこと、そして第二は、資本主義文明の長期の展開と「社会的エントロピー」との関連を明らかにすることである。第一の課題からはじめよう。

(1) エントロピーという概念を物理現象のみならず、もっと広く、人間社会にかかわるさまざまな諸現象についても適用すべきことを説いたのは米国の歴史家ヘンリー・アダムズ (Henry Adams) であるが (*A Letter to American Teachers of History*, 1910), とくに社会科学とのかかわりでその意義を詳しく論じたのはニスベットである。それは「社会的エントロピー」という言葉に置き換えられ、彼の有名な著作のなかで詳細に説明されている。Robert A. Nisbet, *The Social Bond: An Introduction to the Study of Society* (New York, 1970.) Chapter 10 (南博訳『現代社会学入門』〔講談社, 1977 年〕第 3 分冊), 参照。

(2) *Ibid.*, pp. 261, 263-4, 前掲邦訳, 89 頁, 95-96 頁, 参照。

(3) ニスベットは *disorganization* という言葉を使うことに批判的である (*Ibid.*, pp. 262-3, 前掲邦訳, 91-93 頁, 参照)。実際に、社会学的に規定された人間概念のなかに非形式的な、したがって多義的な要素がはいってくればくるほど、その言葉の意味は曖昧さの度合いを高めるので、そのかぎりでは彼の批判は妥当するだろう。しかし、人間の社会的特性を一層構造的かつ機能的に限定し形式化できるとすれば、むしろ *disorganization* という表現がふさわしい。さらに、この方向から「無秩序」の問題にアプローチしようとするれば、いわゆる「カオス学」的手法の適用可能性にも論点がおよぶであろうが、当面これ以上の論及は避けることにしよう。

(4) ここで「文明」の厳密な概念規定を試みる必要はなからうが、さしあたり、まとまった独自の特性をもつ諸文化の集合体のことを「文明」とよんでおこう。その意味で「文明」は「特定の開かれた社会」(たとえば、資本主義社会)であるともいえよう。

II 生命体としての社会

一般に、生命現象は物質の特殊な運動形態と見なされている。その意味で無生物と生物との境界は閉じていないで、連続性をもっていると考えられる。むしろ問題は生命の特殊性を規定する属性を具体的に検出し理論的に整序することにある。とりわけ重要な属性は、生命が始めと終わりをもっている現象だということである。すなわち、生成と消滅との時間経過のなかで生命体は運動しているのである。このような観点から社会を生命体と見なす思考習慣が生まれてきた。こうした想定で社会を考えることにすれば、シュレディンガーが『生命とはなにか』と題する講演⁽¹⁾のなかで展開した議論は社会にも適用できるはずである。ここではとくに、生命のエントロピーにかんする議論を社会にあてはめることを考えよう。

生命体がそのエネルギー源として食料を摂取することは「負のエントロピー」を体内に入れることを意味する。社会にとってこの「負のエントロピー」はなにを意味するだろうか。それは社会の秩序を維持する諸手段の案出という形をとる。その試みは最初、広い意味での自然法の自覚と実践として現れた。自然法秩序は生命体としての「人間」の活動、すなわち衣食住生活と密着して現れてくるので、まさしく本源的に人間的な文化にはかならない。さらに、諸文化の集積が文化圏や文明を形成するようになると、こうした文化は本源的人間社会としての家族をこえた社会の自覚的形成につながっていく。そのプロセスは家族の規模を拡大する方向に現れることもあるし（「家族国家」）、異なる家族間のコミュニケーションの形成（本来の文明化）と結びついていくこともある。とくに家族間の、さらには個人間のコミュニケーションの形成が徐々に密度を高めるにつれ、社会はその秩序を維持するために自然法を補完する手段として実定法秩序をもとめた。その根拠づけは、もちろん、トマス・ホッブズ（Tomas Hobbes）⁽²⁾を嚆矢とする。

いずれにしても、社会秩序は自然法秩序と実定法秩序との合成結果と見なされ、そこに「社会的エントロピー」の増大を抑止する手段が認識され制度化されてきたわけである。具体的には、法制度、政治制度、経済制度（金融制度、財政制度、工場制度等々）、社会慣行や冠婚葬祭などがあげられる。また、明文化されないさまざまな社会的モラルないし社会倫理がその根底に意識されていることはもちろんである。法制度や政治制度は、ことに前者は物理的強制力をともなっているが、社会に生きる「人間」が積極的に遵守しようとしなければそれらの持続性は保障されない。ましてや、それら以外の諸制度あるいは社会倫理は社会構成員たる「人間」の脱「人間」的な、その意味で社会を意識した行動なくしては容易に消滅してしまうことになる。

- (1) Erwin Schrödinger, *What is Life?*, 1948, 邦訳：岡・鎮目訳『生命とは何か』（岩波新書、1951年）、参照。
- (2) いうまでもなく、彼の議論は『リヴァイアサン』において展開されている。ここで典拠としたのは、Thomas Hobbes, *Leviathan or the matter, forme & power of a commonwealth, ecclesiastical and civil* [1651], the reprint text edited by A. R. Waller, Cambridge U. P., 1904, ホブズ（水田洋・田中浩訳）『リヴァイアサン』（世界の大思想 16）、河出書房新社、1972年、である。

III 「社会的エントロピー」の増大

概略的ではあるが、以上のような簡単な叙述だけでも概念的なアナロジーは正当化されるであろう。そこで、あらためて用語法を確定したうえで第二の課題に進もう。

[1] 用語法

まず、「社会的エントロピー」とは「人間」の自由な運動を抑止する

「主体」である社会の秩序が喪失されること、あるいは「無秩序」化の度合いを示す言葉であるが、とくにその秩序喪失の過程が基底的に不可逆的であることにこの概念を用いる意義がもとめられる。負の「社会的エントロピー」という表現も、いわば双対的に定義されるであろう。すなわち、それは社会の秩序を回復させる諸契機（契機）の存在と機能の度合いを意味する。それらの契機は偶然的・非自然的・自覚的にしかもたらされないから、disorderを元のorderへと完全に復元しうるだけの能力をもちえない。しかし、エントロピー増大を抑止する可能性がそれらの存在によって高められることは確実である。つぎに、社会科学、とりわけ経済学のなかでこれまでしばしば使われてきた「定常状態（the stationary state）」⁽¹⁾という言葉（定常状態）を定義しておこう。それは「人間」が動物としての本能の赴くままに行動できる——もっと正確に言えば、機能的に定義された「人間」がシステムとして「運動」できる——絶対的に自由な状態、その意味でホッブズの規定した「自然状態（naturall condition）」⁽²⁾を意味する。なぜならば、ホッブズはまさにこの「定常状態」を彼の思惟の起点としているからである。経済学の領域でリカードの想定している状態（利潤0の状態への蓄積軌道の収斂）やマルサスの「人口法則」によって予想される事態あるいはシュンペーターの想定する「革新」の消滅も「定常状態」に含まれるであろう。

[2] ひとつの近代文明史

以上のような用語法にもとづいて近代文明の展開軌道（不可逆的運動経路）を概括してみよう。

第一に、いわゆる「ヨーロッパ近代」のはじまりは負の「社会的エントロピー」創出の時代として特徴づけられる。一般的にいうと、自然法秩序の自覚のうえに、それを補完する実定法秩序が構築された時期である。つづいて、資本主義文明の自律的展開によって「社会的エントロピー」が急

速に増大する時期が来る。とりわけ、18世紀後半から19世紀前半にかけてのイギリスにおける、あの「原生的労働関係」⁽³⁾の展開はひとつの象徴的なできごとと考えられる。しかし、第三の局面として資本主義への対抗軸が形成されて負の「社会的エントロピー」が生起し「社会的エントロピー」増大の抑止効果を発揮するようになる。それは19世紀におけるユートピア的社会主義その他の社会主義思想の発生と20世紀における社会主義経済システムの出現によって代表されよう。

しかし、20世紀後半になると資本主義文明の再起動がはじまり、「社会的エントロピー」は第二次的に増大する。とりわけ、20世紀末における社会主義経済システムの破綻以降資本主義システムは「定常状態」へと一路前進しているように見える。それはマルサスやリカードの「亡霊」の現実化となって現れ、人口爆発を随伴する「南北問題」の激化や利潤0の「定常状態」に向かったの資本主義システムの収斂が予想できるほどに「進化」ととげている。さらに、資本主義文明の諸要素としての科学、教育、思想などの組織化は、すぐれてコーポレーション化という「定常状態」へと向かっている。すなわち、「パラダイム」保存運動の主体としての「学会」組織、「実学」（すなわち、学問ならぬテクノロジー）習得組織としての「学校」、そしてコーポレーション化しつつある「価値団体」（宗教団体や政党）などにその一端が見出されよう。

- (1) 周知のように、この言葉をはじめもちいたのはミル (J. S. Mill) である。彼は『経済学原理 (*Principles of Political Economy*)』の第4篇第6章において「進歩的状态」の「終点」として「定常状態」を捉えている。
- (2) 「自然状態」とは「文明状態の外側」であってそこでは「ヒトとヒトとの戦争」が常態となっている。詳しくは、Hobbes, *op. cit.*, p. 83, 前掲邦訳, 85頁, 参照。
- (3) この概念の意味については大河内一男『『原生的労働関係』における西洋

と東洋」(『社会政策の経済理論』, 日本評論新社, 1952年, 所収), 参照.

第7節 社会は「自殺」するか——結論的覚書——

最後に, 「社会的エントロピー」の増大を規定する諸契機をあらためて問題としてとりあげ, 社会変動の方向性についてひとつの展望を試みよう. もとより, ここで示される理論的見通しはあくまでトルソにすぎず, 細部の彫琢は別の機会にゆだねることとする.

上述のように, ニスベットは「疎外」「アノミー」そして「逸脱」という諸要因をとくに強調して「人間的エネルギー」の劣化を論じたのであるが, 基本的なカテゴリーとして導入された「社会的エントロピー」の概念そのものにあいまいさが残っていたため, 彼の議論は必ずしも説得力のあるものとはなりえなかった. とくに個人の社会的行動に還元する形で「社会的エントロピー」が定義され, そしてまたその規定的要因としての「疎外」「アノミー」そして「逸脱」もおなじ次元で処理されているので, いわばマクロ次元の社会変動のほうがうまく理論化されえなかったように思われる. ここではひとまず「アノミー」に焦点をあわせてマクロの社会変動分析を素描することに課題を限定しておく.

まず, 個人の自殺およびテロ攻撃の個人的手段としての自爆をとりあげることからはじめよう. 自殺も自爆も「自己解体 (self-disorganization)」であることに変わりはない. 形式化していうと, たとえば SF 小説や SF 映画によく見かけられるように, ロボットが或る条件の生起によって「自己解体」のプログラムを実行するのとおなじである. 問題となるのは「自己解体」を規定するオペレーターである. いま, 自殺については社会学者デュルケーム (Emile Durkheim) によって「アノミー」と名づけられたものがその規定的要因 (システム論的にはオペレーター) になると仮定し

ておこう。⁽¹⁾ 自爆についても個人の強固な価値理念と現実の生活条件への絶望との葛藤が引き金になっていると考えられるかぎりでは、「アノミー」がその要因となっているといってもよい。しかし、果して「アノミー」によって自殺や自爆の根本的な説明ができるだろうか。

「アノミー」は複数の心理的な構造のあいだのディレンマないし葛藤として現れるが、それらの構造は文化や社会や生活——それとのかかわりで自然——の諸構造によって規定されている。後者の構造は「環境」を形成する。ここで「アノミー」から自殺にいたる思惟のプロセスが重大な意味をもつ。というのは、思惟の構造がちがっている人間のあいだでは自殺という行為に帰着するプロセスが異なっているからである。葛藤が主として矛盾の意識から生じているとき、矛盾の自覚が明確に存在している人間とそうでない人間とでは自殺という帰結にいたるか否かというところまで差異を生み出すことになる。矛盾に鈍感な人間、レヴィ・ブリュルのいう「融即律」⁽²⁾を許容する人間のばあい、矛盾の意識が希薄なためにおなじ条件を与えられても自殺にはいたらない。むしろこの型の人間においては別の要因が作用する。それは「環境」である。たとえば、失業によって浮浪者になるか餓死するほかなくなった人間は自殺する可能性が非常に高まる。その理由は将来の行為への自由度が極度に狭まる、つまり、行為の諸可能性ないし選択肢をあたえる「環境」が閉じてしまっていることにもとめられる。行為の選択肢喪失というこの推論は別の自殺形態、とりわけ自爆行為にもあてはまるように思われる。実際に、旧日本軍の「特攻隊員」は、たとえ「お国のため」「天皇陛下のため」といった理由づけを「自発的に」おこなったとしても、他のいかなる行為も許容されえなかったのである。これほどの心理的強制のもとでなくても、たとえば近年のイラクへの外国軍（米軍）の侵略行動に対してイスラム教の宗教理念と現実の社会的混乱・家族の喪失といった事態への絶望感との葛藤のなかで自爆攻撃を決意

するイスラム教徒においては、他に将来への行為の選択肢は与えられていないといってよい。彼らが自爆行動に向かわざるをえない閉じた「環境」はますます拡大しつつある。

こうしたことから「アノミー」と自殺ないし自爆との一意的な関係は必ずしも一般的に定立できないであろう。むしろオペレーターとしての「アノミー」とそれが作用するばあいの「環境」との両方が考慮されなくては、「アノミー」の説明力は低下せざるをえない。したがって、「アノミー・環境理論」とでも名づけられるべき思惟の枠組みが必要になる。そのかぎりでは「アノミー」というカテゴリーは有効になる。

さて、それでは社会は「自殺」するであろうか。社会について、言葉の本来の意味における自殺や自爆を考えることができないことは明らかである。しかし、社会の「自己解体」は論理的に想定可能である。そこであらためて「社会的エントロピー」を社会の「自己解体」を規定するオペレーターとして定義することにしよう。この言葉は一種の無定義述語に近い。すなわち、なんらかの内容的な定義がそこに含まれているのではなく、それが記述する対象を説明する機能をもつ概念としてその用語法が規定されるわけである。そのばあい、社会をいわば擬人化して適用されるべき「アノミー」、すなわち「社会的アノミー」は、無価値状態や無規則状態、もっと一般化した表現を用いれば「無秩序」として現れるが、「無秩序」と同義ではない。というのは、それは「無秩序」をつくり出すオペレーターだからである。この、いわば「無秩序オペレーター」としての「社会的アノミー」は社会のなかでどのように作用するだろうか、またいかにしてその働きは阻止されるであろうか。

確かに、ホップズの提起した自然法秩序ならびにそれを補完する実定法秩序は「社会的アノミー」の働きを妨害して「社会的エントロピー」の増大を抑えるであろう。しかし、そうした法秩序を遵守しうる人間類型が恒

常的に産みだされないかぎり、それ自体の働きはきわめて限定されたものとなろう。それでは、法秩序以上に強力な作用をする恒常的な要因は存在するだろうか。それは家族、とりわけ抽象的単位として機能的に定義される家族——以下では、「単位家族」とよぶことにする——である。拡大された擬似家族は国家にまでおよぶが、そうした擬似家族はむしろ社会的組織として別の角度から把握されるべきである。たとえば、太平洋戦争期に「創出」された日本の「隣組」は一種の擬似家族である。それは政治的支配の構造を固定化するための社会組織の一類型であった。一般に支配（命令・服従）関係によって合理的に構造化された人間集団の典型は官僚制であるが、そこに実現される循環は支配関係のそれであって、その循環運動が維持されるかぎりで日常生活の循環と「調和」しうるにすぎない。別のいい方をすれば、官僚制の構成員としての人間の日常生活循環は官僚制の構造のなかに組み込まれてはいないのである。したがって、それがシステムとして運動するばあいには家族生活の循環可能性は障害として現れることもある。

ところで、「単位家族」の実現する本源的功能は日常生活の循環である。それを妨げる要素を「単位家族」は排除する役割を果たす。ここで注意されなくてはならないのは「単位家族」がそうした機能を実現するオペレーターとして想定されていることであって、当該機能実現の仕方・様式はさしあたりブラックボックスの内部機能と見なされる。したがって、基本的には夫婦関係、兄弟姉妹関係そして親子関係という三つの関係が「単位家族」の構造を規定していると考えことはできるが、それらの関係が実際にはどのような現実的作用を発揮してこの機能を実現するのは度外視されている。その意味で抽象的なのである。他方、「単位家族」の機能的目標である日常生活の循環的反复こそは、フランスの歴史家ブローデルが「長⁽⁴⁾期」と名づけた時間プロセスを創造する。それは不可逆的な歴史のプロセ

スに可逆性を与え、「単位家族」を構成する諸個人に心理的・経済的安定感をもたらす。また、日常生活の循環を否定する諸要素の出現に対して「単位家族」はつねにネガティブに作用するから、そうした属性を具えた現実的家族は家族生活の破壊につながりうる戦争や社会的動乱に対して抵抗するであろう。換言すれば、「単位家族」としての特性を喪失した家族およびその構成員としての諸個人は「社会的アノミー」のポジティブな構成要素となりうる。すなわち、「単位家族」として機能しうる現実的家族はいわば「ディスアノミー」の基底的要素として作用することになる。「単位家族」としての属性がはっきりと存在し「単位家族」として現実的家族が機能するからこそ、社会は「自殺」しないで済んでいるのである。

- (1) 実証的にはさらにきめのこまかい議論、とくに「経済的アノミー」と「家族的アノミー」の重要性にかんする議論が仮説として提起されるべきかもしれないが、ここでは本文のように単純化された仮説を設けるだけにしよう。詳しくは、デュルケーム著（宮島喬訳）『自殺論』（中央公論社、1985年）の第2編第5章を参照。
- (2) Lévy-Bruhl, *Les Fonctions mentales dans les Société inférieures* (Paris, 1910), p. 452（山田吉彦訳『未開社会の思惟』、岩波文庫、1953年、下巻、195頁）、参照。
- (3) もちろん、矛盾に敏感な人間でもこういうことはありうる。というのは、複合的な論理式のなかに矛盾式の伏在していることが一見ただけでは判明しないばかりでありうるのとおなじく、多様な諸構造が複合して結びついている社会において構造内および構造間の矛盾はしばしば認知されないままに存続するからである。こうしたケースについて「融即律」の概念をそのまま適用することはまちがいであろう。
- (4) Fernand Braudel, 'Longue Durée', in *Annales E. S. C.*, no. 4, 1958, 参照。